

巻頭言

学問の基本

会長 渡辺豊和

私は本式の学者でないから「学問」に言及するのは面映いが「イワクラ学」を成立させるために思い浮かぶことを述べてみたい。本式の学者でないといっても学位をもっているわけだし私は工学博士ではあっても建築記号学でとっているからきわめて人文科学に近い。

工学にもそんな部門がある。自然科学は学問としては実は楽なのだ。数式を解いたり、実験したりで仮説が検証されやすい。だから

らといって簡単というのではない。検証すること自体が立派な学問だから膨大な知識の蓄積を必要とするのはいうまでもない。

私たちのイワクラ学を成立させるには自然科学的方法としてはそれほど多様な展開が期待できるわけではない。

秋田県大湯のストーンサークルは発掘だった。だから遺跡の年代測定は発掘地層によって容易に特定できた。しかしこれが何の目的でつくられ、どう使用されたかは定

説がない。

イワクラのほとんどは現在も地上に露見している。素材が石であるため建造された時代が特定できない。それで私の考えた方法は一箇所のイワクラではなく散在するイワクラの分布を地図上にプロットし、地図上にあらわれるイワクラ同志の配列から一定の秩序なり規則を割り出すことだった。この場合は日本列島に菱形ネットワークを描くことがわかった。しかしこのままでは仮説である。

菱形ネットワークの交点はすべてコンピューターで計算して割りだしており三〇メートルの誤差があるにしても交点と交点は五〇キロ近い距離があり、誤差は一〇〇〇分の一以下である。この制度ならば仮説は充分成立する。

検証は交点の現地を訪れ正確な緯度経度を測ることだ。列島南から北まで二〇カ所以上を訪れたが

すべてコンピューターの示す地点に巨石が実在した。列島全体で交点は七三ヶ所。これならば検証が成立したことになる。

私の場合は極めてマクロだった。柳原輝明は奈良県山添村の一ヶ所の巨石群で成功させている。

いずれにしてもイワクラ配置の規則を割りだしその意味を探ったらBC二〇〇〇年の夜天の写しと結論づけられた。

私や柳原の仮説が正しいとしたらイワクラは人口建造物ということだ。巨石を動かして構築したのだからそれを証明できればいい。

これには古磁気計測器を使い各石の古磁気方位を測定しそれがランダムなら人工と断定できる。逆に方向が同一なら自然のまま。ただし地震などで崩壊している場合も方位はランダムになる。それでも崩壊の場合はすべてがランダムになることはまずなく、崩落しな

かった部分が必ずといつていいほどある。するとその部分の方位は一定なのである。こうして高知県足摺岬の巨石群は人工構築物として断定できた（足摺巨石研究会）。この方法を紹介されイワクラ学会でも数例を測定した。すべて人工遺跡だった。

その他検証方法は開発されていくだろうが、いずれにしても自然科学的方法による学問化は明快であり容易だ。

ところが自然科学として成立させるのは容易でない。成立させるとしたら民俗学を含めた文化人類学的方法によるしかあるまい。イワクラが信仰の対象であるのは西宮市甕岩神社の甕岩が如実に示している。

ところが私たちが扱っているイワクラは野ざらしで今では信仰対象とはされていないものがほとんどである。それだから研究対象と

して面白いのだ。

例えば明治時代か、現在よりそれほど遠くない時代に、ある巨石群に関心を寄せ、これは古事記の神が祀られた場所だと宣言していたとする。天照大神とかスサノオといった神社によく祀られているものなら野ざらしはまずない。一度しか記載されていない、いてみればマイナーな神、ときには古事記以前の神名の場合もある。記紀以外にも古代文書はあるから、歴史的にも成立年代が証明されている文書の神名ならまだしも一切記載されていない神名を宣言している場合があるとす。しかも地方神でも地主神でもない無名の神だ。

その神を祭祀する形式まで規定していたとする。こういう人物は神がかりとしかいえない。神がかりの人物のいう神名や祭祀を研究しても普通は学問にはならない。

研究対象に客観性がないからだ。

他人の検証を経ていないものは学問にならない。神がかり人物に信奉者が多数あらわれ、宗教教団になることはままある。だから神がかりの人物はシャーマンであり教祖だ。

教祖を信奉し教団として成立させる分には何の問題もないがこの教祖がつくりだしたイワクラの因縁は教義となっても学問の対象にはなりえない。

それでは野ざらしのイワクラで、かつて行われたに違いない祭祀をどういう形で学問として定着させるか。

たった一つの方法しかない。私たちが扱っているイワクラと酷似するもので現在も神官によつて祭祀されているものをまず探ることだ。もし探しえたらその祭祀を徹底研究する。発生時期、形式など研究すべき事項はいくらでもある

う。

最近知った好例がある。

荻原哲郎の案内で柳原輝明と三人で諏訪、八ヶ岳のイワクラや縄文遺跡をみにいった。一見野ざらしのイワクラがあつた。というか、このイワクラは現在でも諏訪大社の神官が年に一度ここで祭祀を執り行うそうである。

そうとわかればこの祭祀を研究すればいい。人文科学を成立させるには唯一の方法。よく似た多数の事例を比較研究することしかない。レヴィー・ストロースの文化人類学が確立した方法である。諏訪大社のイワクラ祭祀の研究はどの程度なされているかは調べていないのでわからない。もし研究が進んでいるのならメキシコのマヤ、アステカ、南米ペルーのインカ、インドネシアのスラウエシなど類似遺跡の祭祀との比較研究がされているはずである。特にスラウエ

シ島では現在でもイワクラで祭祀が盛大におこなわれている。葬送の場として機能している。

それよりも諏訪、八ヶ岳の場合は縄文土器が発掘された場所から同時にイワクラも出土しているのである。

この土器は特異である。壺なのに人面、蛇、蛙、猪など具体的立体紋様がほどこされていて、一つの壺からは近くから出土した一組と思われる複数の土器群から神話が抽出できることをこの地方の研究者たちがつきとめている。イザナギ、イザナミ、カグツチなど記紀神話の祖形すらつむぎだしている。もちろん徹底した文化人類学的、かつ美的方法を駆使してである。研究者達は「縄文図像学」と呼んでいるが縄文学としては画期的である。学問レベルとしても極めて高い。この成果からイワクラ祭祀の意味を解くことができそ

うである。だから私はこのイワクラ祭祀に注目したわけだ。

それにしてもうかつだった。「縄文図像学」は一九八〇年代はじめ頃には成立していたのである。それを知らなかった。私の学位論文は「記号としての建築」であり、図像学、イコノロジーも含んでいるからなおさらだ。

私も縄文図像学を構想していたが関心を寄せていたのは東北地方と越後、能登など日本海側のものだ。それは造形的には素晴らしい、しかし抽象紋様であり図像学が成立しにくい代物だった。それでも抽象造形からそれなりに読みといていたがやはり客観性に乏しい。だから縄文図像ではなく造形に関心が傾き結局私自身の建築形態のモチーフとして活用するにとどまっていた。これは余談だがいずれにしても学問として成立する要件は仮説とそれの検証だ。これが鉄

則。

諏訪のイワクラ祭祀の意味を探るのに最も手近なのはそのときに神官が読みあげる祝詞の全文を知ることだ。祝詞には祭祀の因縁が示され祭祀対象の神名も当然あらわにされているはずだ。

研究所で知りえた限りではこのイワクラを覆う大樹に天から降りてきた神が依り、さらにその神がイワクラに座す。だからイワクラは神の座する床なそうである。このイワクラは一つだけぼつんと鎮座するから問題にはならないが、大概イワクラは群をなす。イワクラが神の座ならば多数のイワクラ一つ一つに別々の神が座することになる。イワクラ群とは八百万の神の座だったわけだ。奈良県山添村のイワクラ群は夜の天球を写している。だから一つ一つのイワクラは星々だ。となればイワクラは地上の星であり、かつ

神の座でもある。

八百万の神々の一神ずつは夜天の星一つ一つ別々に宿りそれが降りてきて一つ一つのイワクラに座す。ということにならないか。

諏訪、八ヶ岳地方から出土する縄文土器の立体紋様には月の満ち欠けの循環を示すものがあるそうである。出土地とイワクラ群が近接していたり、その中にある場合も多い。イワクラが夜天の星々としたら、月だけではなく星の神話を示す図像もあるのではないか。それを探る。

縄文土器の立体紋様からイワクラの意味を探ると同時にイワクラの意味から土器に込められた神話をつむぎだす。学問とはこうした循環構造を内包する。

しかしイワクラ群の一つ一つのイワクラが夜天の星々を写しているのならば一地方の数々のイワクラ群は一年中の季節ごとの、たと

えば春夏秋冬二至二分の真夜中（午前〇時）の天球をそれぞれ写していると考えられよう。とはいえ以上のことはすべて今私が思いついたことでしかない。まずは自己検証しないと仮説にもならない。それから十分な検証をえてはじめて学説となる。だからこのままで終わってしまったら学問行為ではない。私自身の検証としたら、世界中の他の事例や史料と比較検討する必要がある。比較検討にも厳然としたルールがある。

荻原哲郎がいったことだ。諏訪八ヶ岳の縄文遺跡は信州富士といわれるピラミッド山容の蓼科山を望見できる位置にある。要は蓼科はこの地方の聖山ということ。この山には奈良県山添村のイワクラ群のうち、天の河、鍋倉とそっくりなものがあるという。勿論イワクラ群もある。

山添と比較検討したいというこ

とだった。比較してよく似ていた対象地区や周囲の地形が違うはずなのにどうして似ているのかをまず検討する必要がある。その両方で違うところがあっちこっちでみつかったらその違い、差異というが、これが重要となる。レヴィ＝ストロースの構造主義は差異こそは真相を探る鍵であると重視している。

言葉も一つ一つの単語が成立するのは違う音声構成でできているからだ。「メス」「オス」は違う音声構成だから聞いて意味の違いを了解できる。差異の効用である。諏訪と山添に差異がみつかったらそれを徹底的に洗いだし原因を突きとめることだ。発生、地形、その他差異の原因は多々あるであろう。

ともかく学問研究とはそれなりに複雑な手順と手続きが要る。当会員すべてに専門の学者になるこ

とを望むのではない。愛好者でいていただいておおいに結構。それが設立の重要な趣旨でもあったのだから。しかしまやかしの「学問」に騙されないでほしい。